

## 新 おおさか KEYワード 【第11回】

# 市民の財産としての公園 扇町プールの思い出と平成中村座

扇町公園(大阪市北区)をテーマに、フォーラム「大公園からネットワークする新しい時代のまちづくりピア」が、昨年11月、大阪市立北区民センターで開かれた。主催はNPO法人「もうひとつの旅クラブ」、大阪大学の福田知弘准教授がコーディネーターをつとめ、大阪の文化史から公園一帯を再考したいという依頼を受けて私が基調講演をさせていただいた。

高層ビルが建ちならぶ梅田からも近く、隣接して庶民的な天神橋筋商店街や古い町家の活用で賑わう中崎町もあり、大川や中之島からも遠くない。これらのアクティブな空間に囲まれた地域の“へそ”のような位置に扇町公園はある。

フォーラムの打ち合わせでは、扇町公園の個人的な記憶がいろいろよみがえった。最も古い記憶は、東京オリンピックが終わり大阪万博へと進む昭和42(1967)年頃の小学生の夏、「扇町プール」の水泳教室に通わされたことである。「扇町プール」は、国際水泳選手権のため、昭和25(1950)年に建設された本格的競技場「大阪プール」に付随する施設であった。水泳が苦手だった私は、末吉橋(現・Osaka Metro「松屋町」駅付近)の停留所から長々とバスにゆられて、天神橋を渡って通うのが嫌だったことを記憶している。

一方の「大阪プール」では水泳以外の競技も開催され、プロレスの力道山と鉄人ルー・テーズが世界選手権を競ったこともあったらしい。大阪フィルハーモニー交響楽団の練習場も、かつてここにあった。平成9(1997)年に「大阪プール」は港区に移転され、競泳スタート台が公園にモニュメントとして残された。「扇町プール」の方は同所で平成23(2011)年に全面リニューアルされている。



扇町公園の入口にある競泳スタート台のモニュメント

近年では、平成14(2002)年に扇町公園に仮設された「平成中村座」で見た歌舞伎「夏祭浪花鑑」が懐かしい。ラストの捕り方との活劇のなか、舞台の壁がバタンとひらいて、団七(故中村勘九郎、後に十八代目勘三郎)と徳兵衛(中村橋之助、現・八代目芝翫)が公園へと駆けだしたのにはびっくりした。舞台と客席と公園が一体化した劇的な演出である。

もともと扇町公園の場所には、幕末の「浪花百景」にも描かれる備前岡山藩の陣屋がおかれ、明治15(1882)年

に堀川監獄(大阪監獄)が設置された。それが堺市に移転した後、“大大阪”誕生2年前の大正12(1923)年に扇町公園が開園する。

最初の規模は小さかったが、当時の池上市長や都市計画の専門家で市政を継いだ關市長は、近代都市にはそれにふさわしい文化施設が整っていることの必要性を痛感していた。扇町公園誕生には、市民生活向上による街の発展への希望も託されていただろう。以来、扇町公園は市民の憩いの場であり、様々な集会所ともなって歴史を刻んできた。

フォーラムでも、公園を利用する視線での発言が続き、終了後に実際に園内を歩くと確かに子どもたちの姿が目につく。

扇町公園には「キッズプラザ大阪」(1997年開館)がある。日本最初のチルドレンズ・ミュージアムである。それが子どもたちを呼び、他の公園とは異なる不思議な魅力や特色を生み出して、“静的”ではない“動的”な公園として機能している印象を生んでいる。

また、あらためて気づいたのは公園とミュージアムの親和性である。東京の上野公園や京都の岡崎公園をあげるまでもなく、大阪の天王寺公園には美術館と動物園(博物館法上の博物館)、中之島公園には東洋陶磁美術館、大阪城公園には天守閣と大阪歴史博物館、長居公園には自然史博物館があり、憩いの場であると同時に学習、教育の場として両者は共存している。

フォーラムでは主催者から、ポストコロナの新しい生活を踏まえながら、ここを舞台とした都心型の新しい学びの場「扇町マナビバ」のプロジェクトの提案があった。確かにここは、そうした未来志向の可能性を感じさせる公園である。



「堀川備前陣家(浪花百景)」  
大阪市立図書館デジタルアーカイブより

筆者プロフィール

橋爪 節也 はしづめ せつや

大阪大学総合学術博物館前館長／大学院文学研究科教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼葎堂—なにわ 知の巨人—」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に「大大阪イメージ増殖するマンモス／モダン都市の現象—」(創元社)など。